

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 31 日現在

機関番号：35408

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2011～2015

課題番号：23401049

研究課題名(和文)現代中国におけるウイグル族の民族意識とイスラーム信仰に関する民族誌的研究

研究課題名(英文)Ethnographic Research on Ethnic Identity and Islamism of Uighur in Modern China

研究代表者

西原 明史(Akifumi, Nishihara)

安田女子大学・現代ビジネス学部・准教授

研究者番号：60274411

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は新疆におけるウイグル族と漢民族の「共生メカニズム」構築を目指すものであり、以下の仮説を提案することができた。新疆東部哈密地区では、漢族とウイグル族が日常生活において互いに譲歩と妥協を行っている。そのため両者の間にある程度の「信頼関係」があり、それを背景に相手側が期待する公民像を演じ合っている。またウイグル族の都市エリートと近郊農民の間には強固な絆や敬意があり、それによって自己肯定感や承認意識を得ている。このように民族内外で築いた信頼関係を基に「安定した」自我を獲得し、漢族との間に比較的良好な民族関係を築くというプロセスを哈密において発見したことが、本研究の成果である。

研究成果の概要(英文)： In this research I proposed as follows for the construction of “the mechanism of symbiosis” between Uighur and Han.

In Xinjiang Kumul district, both Han and Uighr are conceding and compromising each other. So they have “reliable relation”, and in this context they are performing the citizen image they hope each other. Besides because there are firm tie and respect between the elites of city and suburban farmers in Kumul Uighur, they can get the self affirmative feeling and consciousness of approval from their partner. In this way, Kumul Uighur can acquire their confidence and pride.

Under such reliable relation Uighur had built not only in the ethnic group but also outside the group, Kumul Uighur have acquired “stable” self awareness and constructed somewhat good ethnic relation with Han. The results of my research is the discovery of this process mentioned above.

研究分野：文化人類学

キーワード：ウイグル族 漢族 中国 フィールドワーク 民族意識 哈密 イスラーム 共生

1. 研究開始当初の背景

中国の少数民族ウイグル族と現地政府当局や漢族間の様々なトラブル(例えば2009年の自治区首都ウルムチでのウイグル族による大規模な暴動とそれへの弾圧)が顕在化する中、研究代表者がすでに長く現地調査を行ってきた新疆ウイグル自治区東部の哈密地区では比較的平穏で良好な民族関係が維持されている印象があった。そこで、漢族との人口比や地理的・歴史的な条件など哈密独自の事情に加え、ウイグル族が中国社会に適應するための何らかの知恵や戦略がこの民族関係を維持するために機能しているのではないかという問題意識を持つこととなり、それらを特定するための調査研究を本科研を通して発展的に継続することにした。

2. 研究の目的

本科研の申請時のテーマは「少数民族と共生する中国の新しい政治体制の構想」である。そのための最初の手順として、代表者の主たる調査地であり、民族関係が比較的落ち着いている哈密地区を事例として取り上げ、そこに恐らく存在するであろうウイグル族と漢民族の「共生メカニズム」を発見し、定式化することを目指す。次に、この「モデルケース」を新疆の他地域・都市における民族関係の実情と比較し、差異や共通点を指摘すると共に、「哈密モデル」の応用可能性を検証する。そして最終的に、新疆において普遍的に適用可能な、「民族共生のためのルール」のようなものを仮説的に提案することが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

新疆ウイグル自治区全域における現地調査を通して関連資料を収集する。具体的にはあらゆる職業・階層のウイグル族に聞き取り調査を行うこととした。また形式的なインタビューだけではなく、ウイグル族と実際に生活や行動を共にする参与観察という手法を採り、彼らの日常的な思考・言動を詳細に収集する。それに関連分野の研究者、郷土史家、文学関係者らによる論考や散文、詩、小説なども加えている。これらの口頭・観察・文献資料に分析・解釈・考察を加え、宗教観、職業観、国家観、民族意識、国民意識、人生設計など幅広い項目について現代ウイグル族の自覚的意識はもちろん、無意識の部分についても解説していく。

なお、調査に当たっては「哈密地区非物質文化遺産保護研究センター」にコーディネートを仰ぎ、新疆各地域・都市の同センターとのネットワークも活用して取材場所や対象を選定してもらった。そして研究代表者の西原は都市部や近郊農村において知識人、商売人、農民、芸術家、宗教関係者らへの取材を行っている。そこから得た資料を基にウイグル族の宗教観、国家観、民族意識や国民意識を明らかにする。研究分担者の金俊華は主に

学校関係者や教育委員会職員へのインタビューを通して新疆の教育制度や家庭教育のあり方を調べ、それらが現代ウイグル族のアイデンティティに与える影響を考察する。

4. 研究成果

(1)はじめに

結論から言えば、本研究が最終目的へ到達するための端緒と考えていた、哈密地区におけるウイグル族と漢族の間の「共生メカニズム」の仮説的構築については達成することができた。これを基に新疆の他地域における民族関係の実情を解析する予定であったが、2013年春以降の新疆における政治情勢の激変でそれまで比較的自由に実施できた現地調査が困難になり、同年の夏には中国入国すらかなわなくなったため、哈密地区と他の地域との比較研究は実現できなかった。

しかし、2011年から13年春まで毎年2度ずつ哈密地区を訪れ、インタビューや参与観察で相当程度の資料を得ていたことや、哈密ではすでに10年近く現地調査を継続しており資料の相当な蓄積があったため、哈密地区における民族関係や民族的アイデンティティの形成過程を検討するには十分な口頭・観察資料が手元にあった。また、3の「研究の方法」で触れた研究協力機関、「哈密地区非物質文化遺産保護研究センター」の若手研究員らによる未発表の論考や同センターの内部資料、その他、ウイグル族の知人らによる私家版での出版物など貴重な文献資料も入手しており、それらも活用しつつ、上述の「共生メカニズム」のモデルを帰納的に構築するところまで研究を進めることができた。本報告書ではその内容やそこに至るまでの考察過程の概要を述べる。

(2)語られる新疆と生きられた哈密

本科研が進行中の2012年から13年にかけて、ウイグル族によるテロ活動が激増し、北京や昆明など新疆外でも発生した。日本でも大きな注目を集め、メディアはどれも「ウイグル族に対する政府当局の搾取や弾圧がこうした事件を生む」と指摘していたと記憶している。要するに、政治的・文化的・経済的に劣悪な状況に置かれたウイグル族が政府や漢族への憎悪や中国社会への絶望を募らせ、「テロ」に走るという構図で事件の背景を解説していたのである。

しかし、広大な新疆に点在するオアシス地域を中心に生活してきたウイグル族の民族意識や国家観、宗教観、そして民族関係は決して一様ではない。例えば、研究代表者の私が10年以上にわたって現地調査してきた新疆東部の哈密地区ではそういった「被害者感情」が比較的希薄で、むしろ自己肯定感や承認意識が強い。メディアで流通しているイメージとは明らかにずれがあるのである。こうした自我が産み出されてくる理由や背景とはいったい何だろう。

(3) 公平と不公平の間で

民族意識と国民意識の両立

哈密における現地調査によって収集したウイグル族の言動を詳細に検討し、その思考や行動パターンを析出したところ、ウイグル族には「公平を願いつつ不公平を受け入れる」という、漢族や政府当局へのいわば「歩み寄り」が見受けられた。マイノリティとして、政治・経済・宗教など様々な局面で不利・不自由な立場に置かれていることへ反発を抱きつつも、あからさまな異議を發することはなく（つまり不公平を甘受しつつ）、穏健で婉曲な方法によって漢族と比べ何ら劣ることはないことを示し（つまり本来は公平であるべきことを訴え）、ウイグル族としての矜持を保とうとしていたのである。

例えばイスラム信仰に一定の制限が加えられる中、哈密のウイグル族は、礼拝の持つ宗教的役割を伝統的な祖先崇拜儀式（ナザル）に移転させることにより、政府との軋轢なく宗教知識の伝承を実現していた。また哈密において一定の発進力を持つ青年知識人たちは、音楽や芸術方面におけるウイグル族の中国文化や歴史への貢献を強調する論文や散文を数多く発表し、当局の許容範囲内でウイグル族社会に民族的自負心を喚起していた。

また、哈密ではウイグル族が政府機関で要職を占めることも多いが、実際、知識人たちは高いレベルの漢語を使いこなすことや、行政組織で一定の地位や信頼を得ることに強い意欲を持っていた。不利を承知で体制内での出世を目指すことは馴化を意味するため、当局や漢族側を安心させることができる上に、ウイグル族の有能さを誇示することにもなる。やはり合法的に民族の威信を高められるのである。このような方法・行動を通して、ウイグル族であり続けながら中国社会の一員として活躍するという、民族意識と国民意識の両立が、哈密においては図られていたと言えよう。

「症候」としての語りの効果

ただ、哈密のウイグル族が「苦渋の選択」を余儀なくされていることは否めない。公平を渴望しつつその見込みがない中で不公平を甘受し続けていると、抑えられた感情がどこかで爆発する。つまりテロなど暴力事件の温床になってしまう。しかし哈密の政治情勢が破綻することはなかった。とすれば哈密の言論界をリードする若手知識人たちが彼らを信頼している庶民たちは、こうした忍耐の代償を支払うことなく「不公平を甘受」していることになる。一体どのようにしてそれを可能にしているのか。

彼らの語りを聞いていると、「矛盾」することが少なくない。政府を批判しておいて、その直後にその言葉を埋め合わせるかのような話に移る。あるいは日頃当局を警戒する発言をしている人が、あたかもそれを恐れないうるまいをする。いつもは中国の体制を強

く否定しているのに、それほど悪いものではないのではないかと思わせる事例を次々紹介する。聞きようによっては賞賛しているようにも受け取れる言葉で漢族を批判する。哈密ウイグル族によるこれらの「矛盾する語り」は、どれも中国の経済発展や社会改革などに対するそれなりの好意的評価になってしまっているのである。こうした矛盾は、それがいつも何気ない日常会話の端々で漏れ出てくるものから発見できる、という共通点を持つ。そこで代表者はこれらの発言を「無意識の発露」として解釈した。精神分析の用語を使えば、抑圧された「何か」が「症候」として出てきている、と考えたのである。

ウイグル族の間には「漢民族は悪、虐げられるウイグル族は善」という支配的なイデオロギーが機能している。その支配の強さは、全く初対面の外国人に向かってこの枠組みに基づいた発言を彼らが遠慮無くぶつけてくることから窺われる。ここまで強固なイデオロギーに反するような経験をしたとき、ウイグル族はもしかするとそれを「抑圧」するのではないか。しかしそれは「形を変えて」よみがえるのだから。だから表面的には中国や漢族への批判（「形を変えて」よみがえった形態）のはずなのに、よく考えれば好意的に思える内容（抑圧された経験）だと解釈できる発言になってしまう。このように、彼らの「矛盾する」語りは、典型的な「症候」なのである。

この「症候」としての語りは、あからさまに政府や漢族を認めるわけにはいかないウイグル族にとって非常に都合のよいものとなる。語りそのものは往々にして「いつものウイグル族らしさ」に溢れウイグル族なら誰にも受け入れられるものだが、実際には正反対の意味が隠されているのだから。こうした「いつもの」語りの積み重ねによって、自分はもちろん、他のウイグル族に対しても政府や漢族への肯定的評価を少しずつ定着させていくことができる。すると、「不公平の甘受」を多少なりとも正当化できることになる。心理的な負担も軽くなる。このプロセスがあって、初めてウイグル族は上述のイデオロギーを破棄することもなく、従って民族の矜持を保ちながら、その上で漢族中心の社会体制に順応していくことが可能になるのである。

(4) 民族関係を俯瞰する

政府側からの譲歩

上記「不公平の甘受」を実現するための鍵になる、政府や漢族を肯定できるような、あるいは少なくとも肯定する意欲を与えてくれるような材料を、私は実際に見聞している。当局は教育や宗教、治安に関する公的措置や通達など様々な分野で若干の「手心」を加えていたのである。

例えば、新疆では2010年から「双語教育

(バイリンガル教育：主要科目は民族学校でも漢語を使用する教育政策)」が徹底されるようになり、それを担うウイグル族教師の漢語力を底上げしなければならなくなった。この措置への強い批判はウイグル族からしばしば耳にしたが、現場の教師に聞くと、彼らが受けなければならない漢語の長期研修のための費用や研修時期、能力を測る試験結果などについて、ある程度配慮がなされているとのことであった。また、経済的な理由で進学が困難なウイグル族子弟を、学費・生活費・交通費全て公費で負担して新疆外の都市で学ばせる、「高中内地班(高校の内地留学クラス)」という制度が実施されている。留学先の学校にはムスリム専用の料理人まで派遣しているようだ。

宗教政策についても次のような事例に出会った。行政の管轄下にある「コーラン学校」以外でのイスラム教育は禁じられてはいるが、家庭教師のような形でコーランを子どもに教える若いイマーム(イスラム指導者)もいるし、出稼ぎ名目でアラブ地域に出向き、イスラムを学んでくる若者もいた。「政教分離」のはずが、農村地域では地元の共産党書記がイマームを兼任しているケースもあった。そもそもイマームはコーラン学校の卒業生が就任することになっているが、哈密の農村地区のイマームは例外なく地元出身者で占められていた。正イマームの下で長年副イマームを勤めてきた者が、モスクに通う常連たちに推されてそのまま昇進するのである。他にも、公的な場でのイスラム宣教は固く禁じられているにもかかわらず、イスラムの神を称え、その教えを伝える文言の入った巨大なポスターが堂々とレストランの壁に飾られていたりもした。政府から公的な指令が発せられる一方で、末端の現場ではこういう「お目こぼし」的な対応がなされていたのである。

理想の民族関係モデル

政府当局による公的制度や発言とは裏腹のこうした譲歩は、哈密のウイグル族が意識的であれ無意識的であれ、「不公平の甘受」を正当化するには十分なプラス材料を与えるように思われる。実際、上述したように彼らはウイグル族としての矜持を維持しつつも、あくまで中国社会の一員として暮らそうとしていた。どちらも表向きの強気の発言とは別に、裏で譲歩の道を探っていたのである。双方のこうした「困難な自制」が両者の間に「信頼関係」を築くことにつながり、哈密地区の政治的安定に寄与していたのである。

このプロセスは、私にフランスの精神分析家ラカンの自我形成理論を想起させた。彼は、信頼し合った自己と他者の関係の中で、相手の意向に影響されてそれぞれの自我が育まれる、と述べた(いわゆる「鏡像段階」)。哈密においてもウイグル族と漢民族や政府が信頼関係の下でお互いに相手にとって十分に受容可能な自己像を形成し、それに規定されながら暮らしている。まさに「関係の中

で自我を作る」というラカンの自我形成モデルに則っていると言えよう。ある程度の信頼関係の下、ウイグル族は当局や漢族が抱く「理想のウイグル族」像に自らを同一化し、「自我」とした。逆に政府や漢族はウイグル族の中の「理想の政府」像や「理想の漢族」像を受容でき、そのように振る舞うようになったというわけである。

こうして哈密の具体的な民族関係や政治情勢を抽象的なモデルへと還元したことによって、「民族共生のメカニズム」を次のように定式化することができる。

「国家的な抑圧・民族的な反発を互いにためらうことを通して信頼関係を築くことができる。その上で、他民族への節度ある理想像を持ち、それを呼びかける。」

この「共生メカニズム」は、要するに共生を可能にする民族的自我を形成するプロセスである。ラカンはそんな自我形成モデルを、母が子どもに愛情を注ぐという普遍的な親子関係をヒントに構想した。ということは、彼にとってこれは人間が自我を形成するための普遍的なプロセスであったはずだ。従って、政治情勢が不安定だとされる新疆の他地域に暮らすウイグル族にこのメカニズムを応用することは十分可能であろう。

しかし哈密と異なり新疆南部ではウイグル族が人口的・歴史的・文化的に漢族を圧倒している。哈密のような「抑圧や反発へのためらい」が実施されるかどうかはわからない。では上記の定式化が無意味なのかということももちろんそうではない。この自我形成モデルは、哈密のウイグル族において以下のような場面でも用いられており、それは確実に他地域でも実現可能なものなのである。

(5)ウイグル族における「情愛の交換」

前節では政府当局や漢族と哈密ウイグル族の間に生じる自我形成過程を定式化したわけだが、同じモデルがウイグル族内部の二つのカテゴリー、都市部に住む知識人と農村に居住する人々の間にも発見できる。前者は官公庁やその外郭団体、あるいは教育機関や国有企業に勤める「国家幹部」と呼ばれる公務員たちだ。それをやめて小規模なビジネスを行う者も含まれる。彼らは専門学校以上の学歴があり、共産党員であることも多い。後者は基本的に年輩の農民たちである。

この両者の間には互いの深い敬意と親密さ、つまり「信頼関係」が存在する。都市住民の多くが元々農村出身であり、そこに親族や友人を多く持っているため、婚姻・葬儀・イスラムの年中行事などで日常的に頻繁な行き来があるので当然とも言えるが、生活水準やスタイル、イスラムとの関わり方がかなり異なるのも事実で、そんな両者がそれにもかかわらず極めて良好な関係を成り立たせているのには、以下のような理由がある。

都市の知識人は自ら農村部に積極的に出かけ、農村の親戚や知人に寄り添い、喜捨などで援助を行い、就職でもできるだけの便宜を図る。農村から訪ねてくればそれなりに迎える。一方農村の人々は、都市生活者として現代化し、その暮らしを維持するために体制に適応して生きている我が子や友人、従兄弟たちを快く受け入れているし、イスラムに対する態度について批判がましいことを口にしたりはしない。これらの対応を一言で言うと、「下手に出る」ということになる。互いに相手よりもいわば「弱い立場」に身を置いているのである。それは「譲歩」と言っても良い。ウイグル族と政府や漢族との間に生じていたことが、ウイグル族内部にも見られるのである。この譲歩に対し、相手側は「親しみや敬意」といった「情愛」で必ず返答することになる。同じ民族なのだから当然であろう。こうして両者の間に深い絆が生まれ、そんな関係の中で相手が自己に対して呼びかけるイメージに同一化することとなる。

例えば都市の知識人は農民たちが「昔ながらのウイグル族」であることを賞賛していたし、農民たちは知識人の「時代と共に生きる」という生き方に敬意を表していた。こうして彼らは「情愛」を交換し合うだけでなく、さらに相手の「今の生き方」に対して「承認」を与え合っていたのである。こうしたプロセスを経て、哈密のウイグル族は自信や誇り、つまり自尊心を獲得していた。以上のように、信頼関係の中での自我形成というラカンのモデルが民族内部でも確かに作動していたのである。哈密ウイグル族内部の二つの階層が密接な関係を築いていたのは、このモデルを起動させて自尊心を獲得するための、いわば知的な戦略であったと考えることもできるのではないだろうか。

それはともかく、仮に政治的・経済的・文化的に厳しい抑圧なり差別なりを受けていたとしても、自尊心や承認感が維持されていれば、絶望の中で無気力になったり、怒りや恨みといったネガティブな感情に突き動かされて自暴自棄になったりすることは回避できる。実際、哈密地区においては情勢が安定しており、そこでは確かに上記のようなプロセスを見出せたのだから。そして、この哈密ウイグル族に見られる民族内部での自我形成プロセスは、同じウイグル族同士のやりとりであるだけに、民族間関係が哈密とは異なる新疆の他地域でも容易に再現できる。このように考えれば、前節で提示した「共生のメカニズム」には応用可能性が確かに認められるのである。

(6) 主体的なアイデンティティ形成

「先に自らの脆弱さを曝露する」ことで他者から愛や優しさを得、それに敬意や忠誠で返すという「情愛の交換」を通して信頼関係を構築し、その中で他者から与えられる像に自らを同一視する。ラカンの自我形成モデル

のいわば前段階にあたるこの情景を想像したのは哲学者レヴィナスだが、哈密のウイグル族に見られたのはまさにこのプロセスであった。第2次大戦のホロコーストを生き延びたレヴィナスが考え尽くしたのは「弱者が必ず救われる道」であったそうだが、少数民族であるウイグル族も哈密でその道にたどりついたのであるかもしれない。

ところでこのレヴィナスは、「情愛の交換」の中で他者から与えられる像を自己が進んで受け入れるまさにその瞬間の自己を「主体的」と形容した。それに倣えばウイグル族の自我形成は「主体的な」プロセスであると言える。自ら積極的に獲得した自我だからこそ、その中身に自信が持てる。自信はさらに自尊心を生む。哈密のウイグル族は民族内外で、こうして主体的に自己意識、つまりアイデンティティを形成していたのである。

本章のこの結論は私たちが現地調査で得た各種資料を基にしているが、深読みしすぎなのではというそしりを受けるかもしれないことももちろん承知している。そこで、最後にウイグル族自身によってなされた「主体的なアイデンティティ形成」の提唱を簡単に紹介し、本報告書を閉じることとしたい。

(7) 検証～詩集『漠魂』の解説から～

漢語で詩を書くウイグル族

本報告書で再三触れた哈密の知識人の中に詩人がいる。彼はウイグル語ではなくあえて漢語で詩を書く。ウイグル族の漢語能力を示すことや、漢族への「歩み寄り」といった理由を本人は口にするが、詩の表現に見られる特徴から考えると、それ以外にもこの詩人の意図を発見することができる。

彼が発表した詩集『漠魂』（砂漠の魂）に収められた作品の多くは、「一人称」で書かれている。また、詩文で使われる動詞には「～着(zhe)」という動態を示す助詞がつけられ、詩の中に描かれた世界に現前性が付与されている。さらに言えば、感情の揺れを吐露する主観的な記述も多い。論理的なつながりを持たずに構成され、支離滅裂に見える詩もある。要するにいわゆる「私小説」的な詩なのだ。このスタイルが、「三人称客観」表現で物語が構築され、それゆえ作者が「造物主＝神」的な立場にある「近代小説」へのアンチテーゼだったことを想起すれば、この詩人が自作で表明したのは「自らの矮小さ、弱さ」であったと言ってもよいだろう。

実際、新疆の自然を題材にした彼の詩の中には、冒頭では陳腐に表現されていた景観が、最後に斬新な言葉で描写されているものがある。叙述の進化がそのまま詩になっていたのである。この過程で彼が駆使していたのは新疆にまつわる様々な歴史についての知識であった。この詩人は自分の感性ではなく、「知性」を用いて詩を書いたようなのだ。感性や審美感、洞察力といった個人的な「内面」

よりも、広く流通している知識といういわば「外部」に詩作を依拠したところに、彼の「自分の弱さへの自覚」が現れている。

以上の考察から彼がウイグル語を詩作に使用しなかった理由が理解できる。ウイグル族にとってわかりやすい平易な言葉で描写すれば、彼の詩が「誤解されないように」そうしたと見なされ、結局は詩人の中に「価値ある内面」が存在することを想定させてしまう。それを避けるために、つまり「内面の否定」をアピールするために、あえて難解な漢語を使用したのである。ウイグル族の漢語能力からすればそんな詩は誤読を誘うようなものだ。「誤解されたくない」という願いが著者にあると想像する者はいないだろう。従って、高尚な何かが詩文の背後に隠されているとはさすがに誰も考えない。

「変わること」がアイデンティティ

ではなぜ彼は「内面の弱さ」を訴える必要があったのだろうか。彼の作品の中に『楼蘭の美女』と題された詩がある。過去と現在を行き来するなどいわば変幻自在なものとして描かれた楼蘭美女に「私」(=詩人)が求愛するものの、拒まれる様を描いている。そして最後は彼女の冷厳さにもかかわらず彼女の身体が埋葬された墓所に「私」が根を下ろすシーンで閉じられる。ウイグル族の祖先にも新疆の大地にも喩えられたこの美女への求愛は、ウイグル族がそれらを自らの拠り所(アイデンティティ)にしようとすることを描いているのだろうし、彼女の拒否はそれが困難であることを示す。実際、新疆にはウイグル族以外にも多数の民族が暮らしており、彼らにとってもそこはルーツだ。また新疆にかつて存在したオアシス住民たちは「ウイグル族」という民族意識を持っていたわけではないので、その意味では直接の祖先とは言い難い。

では、大地や血縁といった確固とした拠り所を持たないウイグル族はどのように自己意識を確立すればいいのか。この詩の最後で「私」が「一体化」しようとした「美女」は「変幻自在」の存在であったことを思い出すと、その答えがわかる。この詩人が構想したのは、「変わっていくもの」をアイデンティティとすること、つまり「変わることが」アイデンティティという新たな自我だったのである。しかしそれは、アイデンティティの一般的なイメージである「一貫性のある強固な自我」とは対照的だ。ウイグル族に受け入れられるとは限らない。そこで「弱い内面」を強調し、「強い内面」というイメージを否定しようとしたのであろう。

前章で、「ウイグル族は民族内外での信頼関係の中でアイデンティティを主体的に形成している」と結論づけたが、哈密でそれなりの影響力を持っていた知識人の一人が、アイデンティティを変えていくことを提唱していた。「変える」というのは明らかに「主

体的」行為だ。そう考えると、本科研を通して得た結論はウイグル族自身によって検証されたと考えてもよいのではないだろうか。

結語

民族内外で交流・交渉を進め、相互の関係に合わせてアイデンティティを更新する。その際にこの「関係」の中のカウンター・パートである「他者」のイメージを修正していくことにもなる。そうすれば、ステレオタイプの民族観(漢族は支配者、侵略者、悪者、一方ウイグル族は被支配者、被害者、善人といった対照的なイメージ)から解放されることが可能になるのである。新疆の民族関係を少しでも落ち着かせていくためには、この「柔軟さ」が必要であろう。そうしたいわば「戦略的適応」とでも言うべき生き方を、哈密地区での現地調査から、そして一つの文学作品から発見し、定式化することができた。以上が本科研での研究成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計10件)

裁きから赦しへ - ウイグル族の語り
「症候」として読む -、安田女子大学紀要、
査読無、Vol.40、2012、pp.113-126

受難の行方 - ウイグル族と神のいない
イスラーム -、安田女子大学生生活デザイン
学会誌、査読無、Vol.3、2013、pp.2-17

レヴィナスによるラカン - ウイグル族
の「主体性」を理解するために -、安田女子
大学紀要、査読無、Vol.43、2015、pp.77-92

哈密ウイグル族におけるアイデンティ
ティの模索 - 現代ウイグル文学を事例とし
て -、平成26~27年度文部科学省科学研究
費補助金研究成果報告書「現代中国における
ウイグル族の民族意識とイスラーム信仰に關
する民族誌的研究」、査読無、2016、pp.5-45

6. 研究組織

(1)研究代表者

西原明史(NISHIHARA, Akifumi)

安田女子大学・現代ビジネス学部・国際観
光ビジネス学科・准教授

研究者番号：60274411

(2)研究分担者

金俊華(KIM, Junhua)

近畿大学九州短大・保育科・教授

研究者番号：30284459

(3)研究協力者

サマット・アスラ(Samat Asra)

哈密地区非物質文化遺産保護研究
センター・所長